

荒川とともに

秩父市立大滝中学校

三年 千島 真実子

窓を開けると一番に、ぬれた土の匂いがした。軽快な雨の音は久しく聞いていなかった。耳に心地良く思わず聴き入ってしまう。

「雨、やっと降ったね。」

アスファルトを打ちつけ、春の草花をぬらすその雨を父と一緒に喜んだ。

父は市役所の水道部に勤めている。どんな仕事をしているのか、と尋ねたら「地域に安全でおいしい水を供給できるようにがんばっている。」と答えた。そして、改めて父の仕事について考えてみると、日々の生活の中でどれほど父が水と密接に関わっているか気づかされた。普段めつたに聞くことのない父の携帯電話の着信音も、大雨のときだけはよく耳にする。対応に出た父の声と表情の真剣さから、管理する水道設備に異常が生じたことが窺えた。すると父は例え食事中であっても急いで出かけてゆく。長びく場合は家に帰ってこない日もあり、そんな父は大滝のことを本当に大切にしてくれていると感じた。

それをまた更に、強く感じたのは部活の帰り、父の働く水道事務所に立ち寄った時だ。事務所に入る途中の階段で逆さにつるされたてる坊主を見かけた。それは晴天を願うものではなく、雨を願ってつるすものだった。雨の降らない日が続いたときに「雨が降ればいいのになあ。」と呟いていた父を思い出す。布で作られた水色のそれは目、口の不ぞろいな縫い目から、手作りであることがわかった。父が作ったのだろう。周りから見れば子どもじみたものかもしれない。でも私は父のみんが安心して生活できるようにという願いと、大滝のことを大切に思っている気持ちを持て深く感じた。

ある日、台風により土砂のつまつた水路の清掃作業を手伝った。誰も知らないよ

うな山の中の作業。父は額に汗を浮べ働いていた。

「お父さんがこんなに大滝のことを思っているのに、私は何もしていない。私には何ができるのだろう……。」

作業を続ける父を見ながら私は考えていた。

足を撫でるように流れる川の水は不思議なくらい透き通っていて、思った以上に冷たく心地良かった。しかし、しばらくしてその澄んだ水の未来が不安になるような現実を目のあたりにした。水にまじり流れていくタバコの吸いガラ、草むらを見れば落ちていく空き缶が目に入る。水の溜っているところでは、油のようなものが水面に浮き七色に光っていた。不気味なその色に鳥肌が立ち、大滝の川さえ汚れてきていることを知った。大滝を流れる川の水はいつでも、いつまでも綺麗なもので、水質汚染なんて関係ないものだと思いきって来た。実際には思いこんでいるだけ何もしないのに。私の住む大滝は荒川の起点がある。この地域の川が汚れているということは、荒川の水質汚染も他人事ではなくなってきたのだ。「責任は私たちにもある。」そう思うと、何ができるのかを考えるようになった。荒川のために私たちができること……。

「水道の仕事で何が難しい？」

と尋ねた私に父はこう答えた。

「水道の水は毎日出ているのがあたりまえ。あたりまえのことをあたりまえにしておくことが難しい。」

そうか、と思った。水道の蛇口はひねればいつでも水が出てくる。生まれたときから当然のことで『もしそうでなかったら。』なんて考えたことすらなかった。しかし、父の答えにこのままの考えではいけない、と気がつかされた。毎日の生活の中に水が溢れていることを、あたりまえ“と思わず、たった一口の水でも大切に使用していきたい。私は荒川・大滝のために私にできるあたりまえのことを心がけ、この澄んだ川を守っていききたいと思う。そして、綺麗な水がずっと大滝の自慢であればいいと、父とともに願っている。